

眞宗寺院門徒等

分離論主張二付一件

眞宗寺院門徒等

分離論主張二付一件

第六大区一小区副区長
正副戸長

其区内眞宗僧侶之内教導上内ニ付分離協和之論を主張致し檀徒を誘導して各々其主張する所ニ同意せしめ或は檀徒より協和論の僧侶へ分離論へ迫候者も有之哉之趣以上外之事ニ候
右両論之儀は素より教導上之事にして檀徒へ示談すべきものに無之檀徒よりも敢て關係致間敷事ニ候条説教之節は両論之差別なく聽聞致候様説諭可取計此段相達候事

(二八七四)
明治七年九月七日

和歌山縣權令
神山 郡廉

教義ニ付拜願

一、先般以來於當縣下眞宗内僧侶ニおいて、神官六宗と協和にて布教傳導可致と確定し則御廳及大教院ニ御届奉申上候向も有之、又も權宜奥にして眞宗獨立にて神官六宗と分離致さんと欲する輩も有、之自由之權とは乍申、各自の見込一宗ならず布教に差支甚嘆ヶ敷事情に御座候、弊僧儀元來聊御時勢を相弁へ大教院に附随し中教院建設に就ても出格の盡力可仕と存居候処拙寺檀家の中頭立候者を初十二七八分離を相称え教導の權利を妨げ色々申募候ニ付段々理解仕候得共一向聞入不申布教に差支困却無限事件先般當時区长よりも庶務御課へ申上候通之事に御座候

然に其後拙寺檀中濱善六と申者本月廿三日莊嚴寺を離檀致度由上申候ニ付私裁任候も文明之御制度ニ相反し候儀故御廳之御処分ニ預度上存候、右事件至急御願置奉申上候、全拙寺檀中之中ニ拙僧共国教宣布之教場ニ出席不致向も教員有之儀ニ付自然右善六之躰裁ニ準ジ候儀を醸候も難斗存じ候間困却之餘拜願候宣敷御処分可上成候以上

第六大区二小区方杭浦

莊嚴寺住職

堀 貫嶺

明治七年

八月三十一日

戸長

堀太郎右衛門

和歌山縣權令 神山 郡廉 殿

書面離檀之儀は人民ノ望に任せ候定規ニ有之候得共教導上分離協和之両
端より離檀致候儀は決して不相成候條今度乙第二百六拾七号達之通可相心
得若今後右教導上ニ付担中之者紛議を生じ檀那寺へ不歸依等之儀有之候
ハズ更ニ其状上申可致事

明治七年九月十二日

分離事件二付拜願

去ル九月九日十日両日當大区三ノ小区御坊村本願寺懸所ニ於て江州眞福寺住職椿原了義出張説教有之旨且又從ニ本山ニ達之儀右其節門徒両三名同道出頭可有之趣鷺森坊舎觸之由にて日高坊舎より觸下候布達ニ付僧侶初門徒数十名罷出候処説教前眞福寺住職并鷺森坊舎役僧西光寺住職立合にて、御達之概畧ハ今般興正寺住職萃円撰信前派獨立之儀教部省へ上請ニ付興正寺より本願寺へ前紙別紙書面之寫一同へ被露致し右書面上ニ聊も無之事件種々申立萃園家は対ニ本山ニ積年之累恩を忘却致し前派獨立申立候様綏々罵評之末分協之論ニ押移り本願寺分離伺ひニ原因等種々申立盛ニ誘導仕候ニ付愚昧之門徒共協和之方向ヲ失ひ僧侶二十餘名之内数名之分離転心之域ニ抵り候様子ニ上伺候前頭椿原了義未着一両日前鷺森坊舎役僧西圓寺住職及田辺勝徳寺神谷唯乘之両名豫メ秘約も有儀と相見え御坊村知音の方へ各自止宿致し法話に事を寄せて分離論を主張致し誘導致候ニ付眞福寺引取之後御坊村之人情不穩後日之動揺を醸し候も難斗と有志之僧侶焦心苦慮仕候処又々田辺勝福寺住職前月廿四日頃再び御坊村津本市右衛門方ニ止宿近傍男女を集め自ら分離論之誘導師と呼称し一名之

分離論を以て迫り甚敷煽動仕候ニ目今御坊村之形勢不容易次第二相成天性寺門徒之内津本市右衛門・岸野助市之両名主称シ同志七、八名調印致し日高坊舎直附門徒ニ相成申度願出不日鷺森坊舎へ差出し可申筈正二傳承仕候然右天性寺住職へ分離同志之者より相迫候甚以困却致候段憫然之至ニ御座候右は全く眞福寺住職及び鷺森役僧西光寺住職之誘導而已ニ候ハズ斯動揺も不仕候得共更に勝徳寺住職之勧誘ニて右様の爲躰ニ及小儀歎敷奉存候尤御坊村之儀ハ第六大区中之小都會ニ候へバ此地にて前顯之通紛議を生じ候ては布教上に支牾不少最早協和僧之説教にては参集之人員も乏しく教院寂寥之光景ニ至り候儀歎息之至りに御座候猶又坊舎觸下三十餘ヶ寺之門徒へ漸々波及仕り到底各寺協和の住職も天性寺同様門徒より相迫候ては實以布教之障ハ申迄も無之困却之至り且僧侶之内分離へ内心歸伺之者も有之報を得変心之僧侶も有之ニては最初の見込も相潰れ加え一二ノ小区ニ乙第二百六拾七号之御布達上ニモ違戻仕候義にて有志の僧侶不堪傍勸其状上申仕候ニ付速ニ鎮靜相成候様御処分之程奉拜願候也

第六大区二ノ小区入山村

三宝寺住職眞宗教義取締

湯川 正 住

和歌山縣令
神山 郡廉 殿

同村副戸長

同小区長

津村 徳四郎

田端 喜三兵衛

萃園家より大谷家へ書面之寫

昨冬已来大教院分離之儀屢々御誘引被下候へ共不肖ニ於ハ從前之通一般協同之決志上置候処自今分不二途ニ相分レ布教之障礙不少因より分不見込呉候以上ハ事務を退判然無之候而其寺格出来候付從前之次第抑オサへ?も有之候得ども布教上不得止攝信同志の末寺引連別派致候間此段御願申上候也

九月十八日

權大教正 萃園 攝信

大教正 大谷 光尊 殿

興正寺ハ明治九年九月本願より離レテ獨立一派ヲ立ツ(芝口)

記

第六大区二小区方杭浦

中井	出口	石田	濱口	濱	出口	濱野	森本	森下	上田	山本	小田切	江崎	上田
源三郎	清八	久七	市三郎	善六	喜七	儀助	七助	善藏	重三郎	徳藏	善助	三四郎	千助

右者分離之名前取調差上申候以上

明治七年九月

戸長

宮井 若右衛門
山本 長七
中川 太助
片桐 幸助

堀 太郎右衛門

同 事 件 拜 陳

一、當大区一ノ小区上志賀村明光寺住職

大畑龍溪豫而より分離論を主張し二

ノ小区方杭浦莊嚴寺檀徒を誘導し同

寺門徒二十名過日離檀致度旨住職へ

申出最早鷺森坊舎へ其趣届書差出候由正ニ傳承仕候然ニ大畑龍溪同

所之誘導既に遂て目今同小区比井浦長覺寺門徒を煽動し同寺門徒よ

り住職へ分離論を相分候困却難堪趣ニ御座候且又隣村唐子浦一行寺

住職下げ紙之通り私共手元迄届出候尤も右届書には往々不審之簾も

不少候得共就中可否共改心御同意支度との申分不得其意次第二候得

共其實際上申仕候也

一、第五大区有田郡及賀茂谷之僧侶より苦情申出候概畧彼地も先達て眞

福寺住職説教巡回已降僧俗共人情不穩田辺勝徳寺住職

栖原並湯浅辺之寺院へ誘導致し後日之動揺も難計豫メ鎮靜之策も無

之哉私共手元迄申出候義ニ付不得止上申仕候間此段御洞察之上御鎮

靜之穩偏て奉懇願候也

半紙ニテ包ミ

上

二ノ小区入山村

三宝寺住職

湯川

正住

ト書セリ

御届奉申上候口上

一、私僧從來六宗神官と協同仕居候処今般大谷大教正殿より
分離二相成候上ハ同行一統御同意申度申出候付ては私共
今度可否共改進同意仕度奉存候間何卒御調印之所御除き
可被来候依て此度御届奉申上候以上

明治七年十月

唐子浦

一行寺住職

丸山 智存



取締御中

方杭浦莊嚴寺堀貫嶺住職進退願之儀
本寺之添願無之爲取揃さし出候様相達可申候也

七年十月廿三日

第六大区二ノ小区

副 区 長

庶 務 課

和歌山縣
庶務課

(1) (1) (4)まで一包みにして半紙に包みあり

過日来眞宗分離論檀徒中において、相称私共協和仕候付而ハ慢ニ離檀申立候者も段々有之寺檀之交際甚難迫仕候先般一二小区ハ別段之御達も有之処右者協和之僧より区長衆へ及御依頼右自本庁之御布令と相称有之杯所々において申觸し候是全く近村眞宗教導職より施説誘導仕候より右等之事件ニ及実迷惑至極ニ御座候比井浦杯者未ダ離檀等申出候場ニハ至り不申候得共遂日近辺教職より令煽動候付てハ到底其処ニ立到可申歟氏程一ノ小区江ノ駒專福寺住職比井浦へ参り分離誘導之節善立儀者亀井教惠之養子なるを以協和立居候ニおいては離縁致候てハ如何杯上申候様承及候右ニ付乙第二百六十七号御布令之由と以近日之内各門徒四五名づゝ并ニ戸長教導職等其会議所ニ呼寄一応御説諭被成度此段宜敷奉願候也

明治七年十一月十四日

小浦圓行寺住職

片岡 命惠

命惠

田端 喜三兵衛 殿

比井浦長覺寺住職

藤田 善立

立善

(2)

先般庶務御課より御申遣ニ相成候本寺之
添願別紙之通取寄奉差上候間宜敷御取計
奉懇願候也

十一月廿日

莊嚴寺

住職

堀

貫嶺

二ノ小区

会議所

御役員衆中

座下

半紙の半切に認めあり

本寺之確書奉呈候右書全拙寺弟正法寺住職より御聞取奉願上候正法寺住職私共代理ニ本寺へ両度世話人差添差出候儀ニ御座候御庁ヲ輕蔑仕候事奉恐入候義ニ御座候鷺森へ伺不申而ハ難出来上申候同所へ願候ハズ本願寺之住持相統不致候ては添書不可致候福藏寺へ申候ハ必定ニ御座候左候得者御庁への出願は後廻しに不致候てハ不叶様ニ相成候と愚意仕宜敷御評議奉願上候

七年十月三十一日

莊嚴寺住

堀

會議所

御役懸衆中 様

當浦莊嚴寺儀は往古より担家一般麥米出来立之頃貳升八合宛寺納致来候
 処私実家(不明)事固より難澁にて其日くを過兼旧藩貢租并に寺納とも
 不納出来二十年程以前家を売払貢租相納候ても銀五拾匁程不足立候事同
 寺先住堀知得より右不足出銀致し実家……屋敷代を麥米不納之方へ
 被引上終に家相統難出来家内之者等親類へ縁組いたし家絶仕候儀二有
 之事業いたし候人二付住し私共も自然な仕合にて難澁落入候其後も同様
 之難儀に罹り可申も難斗二付是非離仕度奉存候

半紙型の半切に認め処々消してあり草稿とみゆ、離担の理由書なるべし書名なし(芝口)

第六大区二小区

副区长へ

別紙離檀之儀ハ何々之訳を以其旦那寺へ及掛合
候哉一應其許ニ而其者共へ尋問致し其趣意詳細
其状上申可有之事

明治七年十一月四日

庶務課

和歌山縣
庶務課

御尋問ニ付奉上候口上

私共住持へ段々願上之儀ハ私共素より西本願寺御直門徒之本分ハ申二不
及旦御本山御法主教儀上御窺之事件ハ民位之協和ヲ檀破するに非ず眞実
之教を被成下度思召を恐承仕候上ハ猶住持右御直末旦御師匠之儀ハ無論
之事ニ候へバ右法主様へ御同意被成度候様救度申上候得共去十月十三日
書付を以て申越候ハ小生ハ到底協和見込之通変心不仕退職仕候間是にて
御見切可被下由隠居ハ同行氣休之爲分離致再勤仕度由被申越候付同十四
日廿二名之者共住持ニ届出前条申越之儀ニ候得バ答を申上願之儀ハ我等
愚民之氣休を望ニあらず眞実之御趣意を御教導被成下度御法主へ御同意
被成下て上々様之御聞濟之上之御住職ニ候得バ御随ひ可申候夫迄離檀致
度候様申上之儀ニ御座候依て右之通御答奉申上候以上

第六大区二小区方杭村

莊嚴寺門徒之内

貳拾貳名惣代

明治七年

十一月七日

和歌山縣令
神山 郡廉 殿

副戸長

堀	石田	山本	上田	濱
太郎	久七	長七	千助	善六
右衛門				

御尋問二付上申

一、私共先祖代々當区片杭浦莊嚴寺門徒之者に御座候処此度離檀いたし
呉候様同寺住職堀貫嶺へ及掛合候品に付何々の訳を以申立候哉其状
可申上旨御尋問之趣承知仕候私共儀は戸長より御布告等聴聞仕住職
より説教被示候二付村中鑑と見込諸事両人之教を相聞候心得二御座
候処住僧儀布教之表と其身之行状相違いたし是を見るに忍び不申且
又本山より御出願之品も有之趣二付本山へ随従いたし居候様申込候
得共受用ふ仕候付不得止離檀之場合二及び候事に御座候へ共改心い
たし呉候ハバ何等異存ハ無之矢張不相變世話二相成申度奉存儀に御
座候仍而御答申上候也

第六大区二小区方杭浦
莊嚴寺門徒惣代

山本 長七

石田 久七

上田 千助

濱 善七

明治七年十一月七日

副戸長 堀 多郎右衛門

朝廷之大旨を奉戴し大中教院にて神官と六宗同一協和三條之御教訓を遵守し布教せられ候処眞宗之内分離せん事を主張し既に當区方杭村莊嚴寺門徒之内凡貳拾餘名之者分離論を住僧に迫り到底離檀之申立ニ至り以之外之事ニ有之然に近頃分離論を誘導いたし候僧侶諸所より入込煽動するに随ひ人心迷乱分離主張し者数ヶ村に波及實に不容易形勢ニ立至り大ニ御政躰ニ関し何共奉恐候事ニ候右ニ付先頃一二兩小区へ乙第貳百六拾七号本廳御布令有之寫差進候何卒御区之御管下へ早々御布達有之度依而御申合および候也

明治七年十一月九日

田端 喜三兵衛

大橋	兵次郎	殿
瀨見	靜人	殿
杵谷	欽十郎	殿
沼野	一夫	殿
中尾	興業	殿

添上申

一、當区方杭村莊嚴寺住職堀貫嶺儀今より数層修学勉勵仕度存じ候間前住堀知得再住仕度との願書先達而上申仕候処本寺之添願取揃上申可仕旨仰越其如同寺へ相達候間宜敷御取扱被成遣候様仕度奉存候以上

明治七年十一月二十五日

第六大区二小区長

田端 喜三兵衛

和歌山縣令 神山 郡廉 殿

十月二十三日十二号

住職進退ニ付拜願

一、大教院御創建以降兼て布教之朝旨を奉戴シ日夜焦心苦慮仕候得共今以其実効ニ難奏恐入候次第ニ御座候右者全ク貧道學業未熟之至卜深ク概歎仕候ニ付不得止當寺前住職堀知得江再住拜願仕不肖儀ハ今数層修学勉勵仕度此段速ニ御許容被成下候様伏而奉懇願候也

明治七年十月廿日

第六大区二小区方杭浦

莊嚴寺住職

堀 貫嶺

同檀中惣代

米谷 太左衛門

右住職進退願書差出し候付上申仕候也

戸長

堀 太郎右衛門

和歌山縣令 神山 郡廉 殿

薦 舉 添 願

第六大区二小区方杭村莊嚴寺住職堀貫嶺儀學業未熟ニ付修學勉勵之爲退職仕後住之儀者同字前住堀智得へ再住爲仕度段同人并ニ同寺檀中一類共より申出候且又本寺福藏寺住職平林智海よりも故障無之候段申出候間宜敷御取扱被成遣度依而奉添願候也

第一大区二小区

明治七年十一月

鷺森輪番法輪寺

黒田 祖禪

和歌山縣令 神山 郡廉 殿

御 届

直川 淨 永 寺
廣瀬 念 正 寺

右両寺住職御坊網代辺へ罷越分協両端之儀ニ付離檀之者へ何用向とも不
申存候得共説教聴聞旁當浦之者参詣仕候趣承知候ニ付爲念御届申上置候

以上

明治七年十一月三十日

副 戸 長

堀 太郎右エ門

印

二小区

會議所

本書は田井 田端春三氏の所蔵にかゝるもので、標題のように記した紙袋に入れた、一束の書類であったのを、芝口常楠先生が整理寫本されたものより、また寫しをしたものである。これは、田端氏の先代田端喜三兵衛氏が、第六大区二小区の区長であったころの書類であるが、これだけでは事件の真相を明確にし難いが、明治初年の混頓たる宗教界・思想界の一斑を示すものと云える。

昭和廿八年九月九日書写完了製本の日に

清水 長一郎

『眞宗寺院門徒等分離主張二付一件』写本終わって

写本を進め内容が判ってくる内、写本の必要は保存上認めるが、これをネット上に公開すべきか迷いだした。内容は事実だろうが『比井崎村誌』^(大正六年)・『日高郡誌』^(大正十二年)・『続日高郡誌』^(昭和五十年)・『日高町誌』^(昭和五十二年)の宗教史には少しも触れていない。保証された信教の自由に絡んだ事件として扱っているのか。

平成二十一年(二〇〇九)年四月二十三日(木)

清水 章博